

ひょうご伝説紀行

- 語り継がれる村・人・習俗 -

「たつの」のはじまり 相撲の神様、野見宿禰



伝説 「たつの」のはじまり
相撲の神様、野見宿禰

紀行 野見宿禰墓
・揖保川と龍野
・野見宿禰墓
・土師神社
・龍野城

関連情報 用語解説
参考書籍
所在地リスト

「たつの」のはじまり 相撲の神様、野見宿禰

今から2000年近く昔の話です。そのころ、出雲国（いずものくに＝現在の島根県東部）に、野見宿禰（のみのすくね）という人がいました。野見宿禰は、たいへん力の強い人でしたが、学問にすぐれた、かしこい人でもありました。

そのころ、大和国（やまとのくに＝現在の奈良県）には、当麻蹴速（たいまのけはや）というこれもたいへん強い人がいました。相撲（すもう）をとると、蹴速にかなう人はいません。

「日本でおれにかなうやつはいないだろう。」

蹴速はそう言ってじまんしていました。

「だれか蹴速と相撲がとれる者はいないか。」

そのころ国をおさめていた垂仁天皇（すいにんてんのう）がたずねますと、家来のひとりが答えました。

「出雲国に、野見宿禰という強い人がいるそうです。」

そこで天皇は、野見宿禰を大和国に招いて、当麻蹴速と相撲をとらせることにしました。二人とも力いっぱい戦い、宿禰は、みごとに蹴速をたおしました。垂仁天皇はたいへん喜び、野見宿禰は領地をもらって、天皇につかえることになりました。

そのころまでは、天皇のようなえらい人が死ぬと古墳という大きな墓を造り、まわりに家来たちを生きたままうめていたといわれています。

宿禰は、「いくらえらい人のためでも、人を生きうめにして殺すのはよくありません」と言って、そのかわりに粘土で作った埴輪（はにわ）をおくように、天皇にすすめました。そこで、それからは古墳を造るときに、人や家や馬の形をした埴輪をならべるようになったと言われています。古墳のまわりの埴輪を、知っている人も多いでしょう。

さて、こうしてかつやくした宿禰ですが、やがてふるさとの出雲へ帰ることになりました。ところがそのとちゅう、播磨国（はりまのくに）まで来たところで、重い病氣にかかってしまいました。土地の人たちは、手厚く看病しましたがそのかいもなく、宿禰は亡くなってしまったのです。

宿禰が立派な人であることをよく知っていた人々は、とても悲しみました。揖保川（いぼがわ）の河原から山の上まで、村人たちが一列にならんで、手から手へ、石をわたして運び、宿禰のために立派な墓を造りました。野原にたくさんの人が立ちならんで働いたので、その場所は「立野（たちの）」と呼ばれ、それが現在の「たつの（龍野）」のはじまりだということです。

その後野見宿禰の子孫は、はにわや土器をつくる「土師氏（はじし）」としてかつやくしました。

紀行「野見宿禰墓」

揖保川と龍野

龍野（たつの）は播磨（はりま）の小京都とも呼ばれる。県道姫路上郡線（ひめじかみごおりせん）をたどり揖保川（いぼがわ）の流れを西に渡って、まず目に入るのは、古い龍野の町並みの北に並ぶ鶏籠山（けいろうざん）と的場山（まとばさん）であろう。「兵庫の貴重な景観」Bランクに選ばれている鶏籠山は、美しい山容とともに、その麓にある龍野城で知られている。そうめんや醤油、童謡「赤とんぼ」などで有名なこの町が、野見宿禰（のみすくね）と深いつながりがあることを知ったのは、『播磨国風土記（はりまのくにふどき）』からであった。

『播磨国風土記』の成立は、文章の表記方法から713年～715年ころとされている。野見宿禰の物語は、奈良時代に入って間もないこのころすでに伝説と化していたようだから、当時の人にとっても「かなり昔の話」という感覚だったのだろう。

野見宿禰墓



参道の長い階段

的場山のふもとに整備された公園から、山腹を巻くように続くなだらかな山道を登ると、10分ほどで野見宿禰墓の下に着く。そこからは、石積みの長い階段を登らねばならない。息を切らして上り詰めた場所が、野見宿禰墓と言われる古墳である。古墳の前には、鳥居と石作りの扉があり、周囲には山道が巡っていて一回りすることができる。この山道が古墳の形を忠実になぞっているならば、野見宿禰墓は円墳ということになりそうだ。古墳の背後からのびる道は、的場山への登山道である。

鳥居と石の扉で、正面からは古墳の様子を見ることはできないが、背後からは少しその中をうかがうことができる。正面が嚴重に閉ざされていて、古墳の中に入るのははばかれるので、端の方に少しだけ登って見てみたが、シダが茂った墳丘には特に変わった所はなく、埋葬施設を想像する手がかりもなかった。



野見宿禰墓の正面

実際、この古墳は調査されていないから、築造年代や埋葬施設は不明である。ただひとつ確かなのは、この古墳が龍野の平野をにらんで築かれていることであろう。墳丘からは、東～南東に大きく視界が開けていて、揖保川の流れを眼下に、その東に広がる市街を一望できる。そんなことから、「揖保川の石を手渡しで運んだ」という伝説もできたのだろうか。



墓からの眺望



石の扉の紋

古墳と相撲をめぐって播磨には、もうひとつ興味深いことがある。6～7世紀の古墳からみつかることがある「装飾付須恵器（そうしょくつきすえき）」と呼ばれる土器である。これは須恵器の壺などに人や動物などの小さな像をつけて、当時のいろいろな情景を作ったものだが、その中に相撲を表した小像がつけられたものがあるのだ。少なくとも古墳時代後期の播磨では、相撲がおこなわれており、それは古墳を築いた墓の主たちにとって大切な行事だったことは確からしい。野見宿禰、相撲、装飾付須恵器。これらはどんな出自をもち、どんなふうに関係しているのだろうか。

相撲の神様である野見宿禰の、墓に設けられた玉垣は力士が寄進したもので、名力士や、今も襲名されている行事などの名前が刻まれている。

装飾付須恵器の小像 力士と行事
(小野市勝手野古墳群出土・兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所提供)

土師神社



土師神社の参堂

揖西町（いっさいちょう）の土師神社（はじじんじゃ）のあるあたりが、風土記に記された「桑原里（くわばらのさと）」である。現在は新興住宅地となって、日下部里の面影を探すことも難しいが、かつては水田が広がる中にぽつぽつと丘陵が散在する景観が広がっていたことだろう。



土師神社拝殿



土師神社拝殿

小高い丘に建つ土師神社は、野見宿禰を祭神として祭っている。土師氏は野見宿禰を祖先と仰ぐ氏族で、古墳の造営や埴輪・土器などの生産をおこなった集団である。土師神社がある場所の大字は土師、小字は梶ヶ谷（かじがたに）といわれる。梶ヶ谷は「鍛冶（かじ）」に通じるのであろうか。この場所の小字名が、いつの時代のことをあらわしたものはわからないが、土器作りや鍛冶がいずれも古墳時代の先端産業だったという事実は、さまざまな想像を膨らませるのに十分である。

龍野城

龍野の町並みを見下ろす鶏籠山のふもとに、龍野城がある。この城は16世紀の初めに赤松氏（あかまつし）によって築城され、幾度もの変遷を経て、脇坂氏（わきさかし）でその歴史を閉じている。白壁の堀に沿って城跡へ続く石畳を登ると、正面が復元された本丸へ向かう櫓門（やぐらもん）、右手には龍野歴史文化資料館がある。背後の鶏籠山頂は、詰の丸とも呼ばれる戦国期の山城だが、江戸時代に使われることはなかった。現在の本丸には、復元された櫓や御殿が建つ。

城跡の北西からは、鶏籠山山頂へ登る山道が整備されている。

城跡の南西、龍野小学校のそばを通る道に面して、家老門が残されている。龍野藩の家老屋敷の門と伝えられる重厚な門で、たつの市の文化財に指定されている。この付近では、小学校のプールを囲む堀も、白壁、瓦葺（かわらぶ）きに造られていて、城下町の景観が保たれているのは訪ねる者にとって本当にうれしいことである。

家老門あたりから見る城跡は美しい。背後の緑に白壁が映える。春には桜が彩りを添えてくれるそうで、ここに住んでいる人たちがうらやましくもある。

龍野城近辺
(日本真景・播磨・垂水名所図帖)

龍野城の遠景



龍野城



龍野城



龍野城と鶏籠山



家老門

他にも、龍野の市街には近世～近・現代の歴史をとどめる場所が多い。時には伝説の旅から少し離れて、町中に残る歴史的な場所や風景を探してみるのも楽しいのではないだろうか。

用語解説

【野見宿禰】のみのすくね

『日本書紀』に登場する人物。相撲の神。出雲国（いづものくに）出身で、天穗日命（あめのほひのみこと、またはアメノヒボコノミコト）の14世の子孫と伝えられる。垂仁（すいにん）天皇の命により、当麻蹠速（たいまのけはや）と相撲をとり、互いに蹴り合い腰を踏み折って勝った。その後、大和国当麻の地を与えられ、朝廷に仕えたという。

『日本書紀』によると垂仁天皇の皇后の葬儀の時、殉死に替えて埴輪を案出し、土師臣（はじのおみ）の姓を与えられたとされるが、考古学的にはこうした埴輪起源伝説は誤りである。土師氏は代々天皇の葬儀を司り、後に姓を大江や菅原などに改めた（菅原道真是野見宿禰の子孫ということになる）。

『播磨国風土記』では、播磨国の立野（兵庫県たつの市）で病により死去し、その地に埋葬されたとする。

【垂仁天皇】すいにんてんのう

第11代の天皇。記紀によれば、丹波から日葉酢媛（ひばすひめ）を迎えて皇后としたという。日葉酢媛が亡くなった時、野見宿禰（のみのすくね）の進言に従い、殉死に替えて土で作った人形を置いたとされる。埴輪の起源説話として著名。また『古事記』では、石棺作りや土器・埴輪作りの部民を定めたとしている。このほか、相撲の起源説話、天日槍（あめのひぼこ）渡来、田道間守（たじまもり）の伝説などが知られる。153歳まで生きたとされるなど、伝説的要素が強く、史実性は確かではない。

【装飾付須恵器】そうしょくつきすえき

古墳時代後期に見られる須恵器の一種。大型の壺（つぼ）、高坏（たかつき）、器台などに、ミニチュアの壺や人物・鳥・動物などの小像をつけたもの。ミニチュアの壺を多数つけたものは、「子持須恵器」と呼ばれることもある。

【龍野城】たつのじょう

たつの市龍野町にある城跡。別名朝霧城。16世紀初頭、赤松村秀によって、鶏籠山山頂に築かれた山城に始まる。天正5（1577）年に、城主赤松広英が羽柴秀吉に降伏して赤松氏の支配は終わった。

江戸時代初め、本多政朝が龍野藩主となり、鶏籠山山麓に城を移した。その後、藩主は小笠原氏、岡部氏、京極氏と変わり、1672年に脇坂氏が入って幕末まで藩主をつとめた。

【土師氏】はじし

古代の豪族。姓（かばね）は臣（おみ）であったが、後に連（むらじ）、次いで宿禰（すくね）となった。アメノヒボコの14世孫である野見宿禰（のみのすくね）を始祖とし、土師部を率いて土器（土師器）、埴輪の製作や、天皇の葬儀に従事した。奈良時代以降、土師氏から菅原氏、秋篠氏、大枝（大江）氏などが分かれた。

【埴輪】はにわ

古墳に立て並べた、日本固有の焼物。岩手県から鹿児島県にかけて分布する。古語で土あるいは粘土を意味する「八二」に通ずる。筒状の円筒埴輪と、人をはじめさまざまな器物や動物をかたどった形象埴輪とがある。

起源は円筒埴輪の方が古く、弥生時代末に埋葬儀礼に用いられていた器台と壺（つぼ）が祖形である。形象埴輪は古墳時代前期後半頃から登場することから、野見宿禰を埴輪の始祖とする『日本書紀』の伝承は事実と相違する。

【播磨国風土記】はりまのくにふどき

奈良時代に編集された播磨国の地誌。成立は715年以前とされている。原文の冒頭が失われて巻首と明石郡の項目は存在しないが、他の部分はよく保存されており、当時の地名に関する伝承や産物などがわかる。

参考書籍

	書籍名	刊行年	著者名	発行者
伝説	郷土の民話西播篇	1972	郷土の民話西播地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
歴史・文化等	日本古典文学大系2 播磨国風土記	1958	秋本吉郎 校訂	岩波書店
	兵庫のふるさと散歩 3. 西播編	1978	兵庫のふるさと散歩編集委員会	神戸新聞出版センター
	増補改訂国史大系 日本書紀前篇 垂仁天皇7年の祭・同32年の祭	1981	黒板勝美編	吉川弘文館
	はりま伝説散歩	2002	橘川真一	神戸新聞総合出版センター

所在地リスト



野見宿禰墓	たつの市龍野町北龍野
土師神社	たつの市揖西町土師
龍野城	兵庫県たつの市龍野町

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 0792-88-9011

第1刷 2007年4月1日